
The song is weapons

鷹鷲飛来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The song is weapons

【Nコード】

N7200I

【作者名】

鷹鷲飛来

【あらすじ】

本来の目的とは別に開発されてしまった音響レーダー。それを搭載した07式早期警戒管制兵、初音ミクは特殊部隊に配属される。彼女の歌は、果たして幸福の歌なのか？それとも死を予告する死の歌なのか？

開発

彼女が起動したした時、彼女は私にほほ笑んだ。

私はある会社の技術者だ。主にロボットや電子音などを専門にしている。今まで様々なロボットを作ってきた。それらはほとんど商品化された。

ロボットと言っても子供のおもちゃ程度の物ばかりだ。一番大きいものといえば、二足歩行でテレビ等のリモコンを操作できる物くらいだ。しかしこれはコストが高すぎたため商品とらなかった。

ある日の事だ。会社からあるプロジェクトが持ち出された。

歌う事ができるロボット。

私は興味があった。音とロボットを組み合わせた物は今までなかった。しかも歌というのだからもうたまらない。商品化のためでなく会社のアピールのためだと言う。だから思う存分にできる事ができると思った。

私はこのプロジェクトのリーダーとなり、毎日毎日この事に熱中した。

やがて数年がたちやっとなし完成した。ロボットは歌の声から基づき、少女のようにした。髪の毛は青く長いツインテールにして、ネクタイをつけ、スカートを穿かせた。ついでに機械少女っぽくヘッドホンも付ける。開発チームの女性の人達がデザインしたのだ。さらに女の子っぽくするため、限りなく人間のような感情を持たせることができた。このロボットは今までで最高の出来となった。せっかくなので名前も付けてやった。ロボット史上初めて歌う事ができる、未来に繋がるロボット。だから初音ミクと付けた。

私たちはもうこれとは言わずに彼女と呼んだ。

彼女を起動させると、青い目が開きほほ笑んだ。その微笑みはす

ごく可愛かった。

彼女は様々なテストを行った。

歩く事や手を動かすこと、そして歌うこと。感情についても行われた。感情も良くできていた。だが何かが足りなかった。人工知能を付けたからと言ってもやはりこればかりは仕方なかった。そのため人と人の察し方を記憶させ学ばせるようにした。

あるテストが行われた時、皆は驚くはめになった。

そのテストとは、彼女が自分の発した歌を彼女が感じる事が出来るかという物だった。

この結果彼女は自分の音かどんなに小さくても識別する事ができ、反響する音が何処で反響したかも分かる事が判明した。そしてその正確さは異常だった。というのもレーダーよりも正確だったのだ。この事を発表したのが間違えだった。

発表の次の日。私たちのところに防衛省技術研究本部というのが来た。

要件は初音ミクを渡して欲しいとの事だった。

私は反対したが会社側はの方が儲かると判断し、渡す事となった。その時、私もそちらに行くこととなった。

彼女の察知能力は異常であるためこれを軍事目的で活用としていた。

現代戦争において大切なのは情報。空軍では早期警戒管制機AWACSと言われる物がある。

これは高空で待機し、広範囲の様子をレーダーで掴み、他の戦闘機や偵察機に情報を送る役割をしている。米空軍ではE-3Cセンチリーが使われ、航空自衛隊ではこのひと世代前のE-2Cを使っている。

だがこれは空中だからこそ超広範囲を察知できるのであって、陸

上となると障害物等が邪魔となり難しくなる。

しかし初音ミクは障害物の場所まで把握し、その奥にいる敵も捉える事が出来る。

言わば陸上型早期警戒管制機GWACSである。

これが防衛省が欲しい物である。

彼女はもう歌うためのロボットなんかではない。兵器だ。歌を歌う事で敵を発見する兵器。私はどれだけ彼女の歌う歌が美しいと思っただろうか。それが皮肉なことに死と破壊を知らせる歌となってしまった。

悔やんでも悔やみ切れない。

最後に彼女の感情は残してやる事にした。

兵器となっても誰かを幸せにする事ができるように。

初音ミクは07式早期警戒管制兵と名が付けられ、初音ミクは愛称となって試験としてどこかの部隊におくられた。

開発（後書き）

元はP i a p r oに投稿した作品です。ちなみに退会済みなので今はここでしか読めません。

今読み返すと、若気の至りっていうのが感じられるなあ

読んでくれたらありがとう

新兵器

俺の名は蒼井良。本当なら高校1年だ。しかし違う。

2001年、特殊対テロ部隊という組織が編成された。この組織は少年少女で構成されている。理由は少年少女なら油断を招くから、そして敵に潜入しやすいという事だ。だがこれは表向きの口実に過ぎなかった。

俺はその第四特殊対テロ小隊の隊長だ。部下もいる。

俺達は今まで様々な訓練や実戦を体験している。子供だからと言って弱い訳ではない。少なくとも普通の自衛官よりも戦える。

俺の立場はこんなところだ。

ある時大きな箱が届いた。ちょうど冷蔵庫のような大きさである。この箱の中は兵器であること確かだった。報告では新兵器ということとで送られたらしい。俺達はその兵器のテストをするという事だろう。

箱は今車庫にある。戦車などを収納できる大きな車庫だが、それはあくまで家にしては大きいというものだ。実際、特殊対テロ部隊は家のような物が拠点だった。だからこの箱は少しばかりでかい。俺はその箱を車庫で開けた。

箱の中には少女がいた。だが少女にしては派手な格好だ。部下の定本海画が目を細めて言った。

「どこが兵器なんだ？」

まったくもってその通りだ。だが先ほどから何も動いていない以上人間ではなさそうだ。兵器の説明書を読んでみた。隊員にも分かるように朗読した。

「07式早期警戒管制兵 愛称初音ミク

少女のような姿をしており、口から発する声により地形、敵を発

見しデータ化させる。いわゆるGWACSである。

また戦闘時には小銃、無反動砲などを使う事が出来る。

操作等は必要なく、指示を出せば従ってくれる。．．．だよ。
起動してみよう。」

俺は起動させた。起動と共にこれは俺にほほ笑んできた。

「07式早期警戒兵、初音ミク。起動しました。」

これには感情があると書いてある。だが口調からもそんな事は感じられない。試しに喜びとは何か聞いてみる。

「喜び．．．喜ぶこと。嬉しいこと。またその．．．」

「そうじゃない。喜びとはどんな感情だ？」

「理解不能です。」

「なら．．．そうだ、お前が俺に褒められたらどんな感情を持つ？」

07式は少し合間を置き答える。

「喜びです」

「何故だ？」

「理解不能。原因は人間的感情が湧き上がるから。」

「は？」

「人間の感情についての理解は科学、文字、言葉ではできません。」

「こいつには感情があると分かった。こうまで言われるとそう理解するしかなかった。」

だが何故感情なんて物を付けたのだろう。俺には分からないが、知る必要もない。とにかくこれをどう使うかが問題だった。明後日作戦を行うことにした。

新兵器（後書き）

本当に若気の至りですね。

読んでくれたらありがとうございます。

成果

ありえない。

見るからにこの戦闘の激しさが分かる。07式早期警戒兵、愛称初音ミクはただ立っていた。その周りには沢山の死体がある。腕が転がり、頭が転がりと様々なものが転がっている。

あまりの驚きにその場に駆け付けた。そこで暗い顔をして初音ミクは言った。

「作戦完了しました」

初音ミクは異常な兵器だった。

俺はこいつ試そうと、日本のテロ組織の拠点と一緒に制圧しようとした。しかしCQBはおろか、一発も撃つことなく制圧した。

初音ミクはいきなり歌いだし俺達が思わずそれを美しいと見とれている間に、初音ミクは敵のビルの障害物や敵、更には武器までもデータ化し、そのまま突入した。初音ミクが装備していたのは銃剣のみ。たったそれだけで敵を皆殺しにした。銃弾などミクの電磁装甲の前になう訳がなく、あっという間に銃剣が切り裂いていった。しかもこれだけのことをミク自らが考えてやっている。兵器にしては異常なものだった。

しかしおかしいこともあった。作戦終了後悲しい顔をしていた。感情だ。説明にはこいつが感情を持つているとのこと。では何故付けたのだろうか。これだけのことをする兵器に何故感情など付けたのだ。俺には理解できなかった。

ミクを回収すると俺に問いかけてきた。

「私は何故こんなことをしなくてはならないのですか？」

「お前は兵器だからだ。」

こいつは自分が兵器だと理解していないらしい。あるいは理解して

も兵器とは何か知らないようだ。

「私は兵器なのですか？」

「そうだ」

「ですが私の開発目的は違います。」

「どういうことだ。開発目的が違うだと。」

「ならなんだ」

「データ無し」

「なに？なぜ無い。自分が別の意味で作られたと分かるのに何故無い？」

「データは暗号化されています。パスワードをお答えください。」

機密事項なのかもしれない。俺は一度諦め、仲間の定本に話してみた。

「怪しいなそいつは。調べてみようぜ。」

「ああ」

俺は少しこのことに興味を持った。この兵器は兵器ではない気がしたから。

成果（後書き）

．．．全く更新していませんでした。すみません。
バックアップがあるので、連投もできるのですが、どうにも面倒だったので放置していました。本当にごめんなさい。
それにしても．．．今でこそ若気の至りを感じてしまいます。正直、
恥かしいです。

読んでくれたらありがとう

イラクにて

今回の作戦は明らかにミクのためだ。

イラクの激戦地域に送られることになった07式早期警戒兵、初音ミクは俺が面倒を見ることになった。この初音ミクは紛争地帯でどのような結果を出すのかなど、日本にいればまず分からない。そのためイラクの米軍基地に送られるのだ。

俺以外の隊員は万が一のこと考え、日本で待機するのだ。

基地ではすでに作戦の内容が決められていた。しかしそれは、07式早期警戒兵をナメた作戦だった。

作戦内容は市街地での戦闘。この地域周辺にテロが多発するという情報が入り出撃するのであった。またこの地域は米軍にとっても補給経路などにもなっているためテロをどうにか静める必要がある。敵も補給経路だとすでに情報を掴んでいる様子だ。ミクはこの作戦に参加するのだ。

ミクと俺は二人で一つらしく、ともに行動することになった。そして俺達の役目は米兵と共にCQBをすること。これは俺にとっては大変だが、ミクにとっては簡単すぎである。前までは銃剣一本で戦ったのに比べ、今はMINIMI機関銃を装備しているミクにとってこれはひどい。

M2ブラッドレーから降りると、いきなりミクは歌いだした。米兵は笑っていた。英語の中に平和ボケとか、オモチャとか、そんな言葉が聞こえた。

しかしブラッドレーの乗員は違う。相当驚いている。

ミクはすでにデータ化していた。敵の位置。地形。建物内部の状況。さらには敵の武器。このデータは近くにいるM1エイブラムス

にも伝わっている。

ミクは命令を無視して、飛び出し、敵が立てこもっているビルに入っていく。ビルの中で激しい銃撃戦の音が響き渡る。その銃声中にはRPGのような音も聞こえる。

数分が経つと、ミクの無線が聞こえた。

「制圧完了しました。また敵の中心人物と思われる人間を捕獲しました。」

あっけにとられた米兵たちは、ただそこに立っていた。彼らは相当驚いているようだった。

ミクにダメージは一切なく、ミクに搭載されたカメラの記録を見るとすさまじさが分かる。

銃弾がM I N I M I 機関銃に当たらないように、空いている片方の手を銃に寄せ、どんどん敵を撃ち殺す映像。RPG-7を見事に避けて射殺。他の敵もこんな感じでやられていく。

映像が終わってミクを起動させると、ミクは俺に告げた。

「なぜ私の歌を皆笑っていたのですか？なぜ驚いていたのですか？なぜこんなことを聞いてくるのか俺が聞きたい。しかしこれは機密事項だ。触れることのできないこと。」

「お前の歌が場違いであつたからだ。」

「なぜです？」

「なぜといわれてもな、、、」

「私は歌を歌うためのものではないのですか？」

俺は今の言葉を逃がさなかった。

彼女は歌うために生まれてきたのだ。それはリーダーとしてではない。

俺は少しずつ彼女に近づいていた。

イラクにて（後書き）

ただ兵器を書きたかっただけ？

．．改めて読むと、そう突っ込みたくなりますね。というかあり得ないですね。

まあ、仕方ありません。

読んでくれたらありがとう

存在の本当の意味

ふと思えばここに彼女がいる自身おかしいのかもしれない。

イラクからの帰国後、俺は彼女に疑問を持った。

こいつの兵器としての評価は相当なものだ。戦術兵器と言っているだろう。

銃弾、爆風、催涙弾、生物兵器、化学兵器、これらが襲いかかるうとしても全く無力である。そしてそんな状況下であつても彼女は歌い敵を把握し、データ化する。

なぜこんなにすごい兵器が俺達のところにきた？はたして試験のためだからだけであろうか？

そもそもミクには謎が多すぎる。

感情がる。歌う。これらがなぜ兵器に付けられた？

答えを聞くために俺と定本は防衛省技術研究部へ行く。

ダメ元で行ってみたが意外にも俺たちが特殊対テロ部隊の第四特殊対テロ小隊と言うと話が聞けた。

しかしその話は07式早期警戒兵についてであつてミクについてはない。

ミクについて聞こうとしても無駄のようだった。

やはり答えなど聞けないと思いきや、外に出ると一人の技術者がまえにあらわれた。技術者はとても人を殺すようなものを作るようには見えなかった。それは若さのせいではなく、表情からだ。

「君たち初音ミクを知っているんだね。」

はい、と応えると公園に連れて行つた。

公園のベンチに三人が座り、一息つくと彼は言った。

「ミクは元気かい」

まるでミクを人のように言っている。

やはり知っているのだろう。ミクについて。

「あの、なぜミクに感情なんてあるのです？」

俺は単刀直入に聞く。

すると悲しそうな顔になる。

「彼女は元々兵器なんかではなかった。」

「えっ」

隣にいた定本も驚いている。あれだけの兵器がまさか違う目的で作られたと確信するのは時間がかかった。

「彼女は歌を歌うためのロボットのはずだった。しかしミクにあのレーダーのような機能があると知って、防衛省が来た。そしてミクを兵器としたんだ。」

彼女の持つ感情は女の子をイメージした感情になってる。機械ではなく人間のような子だったからね。そして皆を彼女の歌で楽しんでほしかった。

それが皮肉なことに死を伝えるような歌になってしまった。」

俺は他人事とは思えなかった。

自分だって親のせいで、子どもでありながら兵士となった。本当なら人など殺していない生活を送れるはずだった。俺はミクと同じなのかもしれない。

その後もミクについて聞いた。

しかしまだ解けていない謎があった。

それは何故俺たち部隊にミクが送られたのか。

存在の本当の意味（後書き）

展開早すぎだろー。

でもこれ、合計で50話程度まで続くんです・・・。

piaproでは一応読んでくれる人もいたんですけどね。でもまあ、あのサイトだかかもしれないせん。

読んでくれたらありがとう

奇襲

確かにミクの意味は分かった。それなら今までの発言も分かる。

しかし、なぜそれが俺達特殊対テロ部隊に送られたのかは分からない。こんな兵器は自衛隊に送られた方がいいだろうし、俺たちが使って効果は100パーセント引き出せるとも思えない。ではなぜ？だがこんなことを考えている暇はないようだ。

「完全に包囲されています」

部下がパソコンのディスプレイを見ながらいう。

困んでいるのはこの前制圧したテロ組織の兵士だ。みんな武装している。きつとミクのことを知ったのだろう。ミクさえ手に入れば完璧なテロができるだろう。でもミクは意志を持っている。敵になるのはほぼ不可能。しかしながらそんなこと知っているわけがない。そうとも知らないテロリストはこちらにRPG-7を向ける。

この家は確かに防弾だが、さすがにここまででは耐えられるのかわからない。だから俺は叫びながら対比する。

「RPG！」

声に反応してみんなが対比する。

このままでは確実に俺たちは壊滅する。

かと言って、もうミクを使用する気にはなれなかった。

彼女は平和の犠牲と言えるだろう。日本がこんなに平和平和と言っているのもこの犠牲のお陰だ。俺たちもそうだ。高校生活などしない。甘い恋にも落ちない。クラスメートなんていない。代わりに日々戦闘をしている。この姿を見て人は何を言う？人殺しだの戦争好きだの言うかもしれない。だが果たして本当にそんな批判をすることができるだろうか？そんな人殺しのお陰で平和に暮らせるのではないだろうか？

ミクは元々人を喜ばせるものだ。彼女にこんな扱いはさせたくない

い。

不意に俺の頭にミクの言葉がよみがえる。

『なぜ私の歌を皆笑っていたのですか？なぜ驚いていたのですか？』
言葉の意味が痛いほどわかる。だからもうミクは使わない。いや使いたくないのだ。

俺たちは小銃を構えて次々に射殺する。だが数が多すぎる。そのうち味方が倒れる。

「大丈夫か？」

「え、ええ、なん、とか」

俺は肩を貸そうとする。だがその瞬間、肩を貸そうとした味方に銃弾が飛ぶ。ヘッドショットだ。

気が狂い始めた。しかし俺の目の前に少女が立った。

「ここは守ります。」

「待てミク、命令は．．．」

「これ以上被害を出すわけにはいきません。ですから．．．ね？」
そんな事を言ってミクは微笑んできた。成長している。彼女の感情は成長しているのだ。

ミクはMINIMI機関銃を持ち片っ端から撃ち殺す。だがRPGをもろ食らった。俺たちをかばうためだ。そのためにふっ飛んだ。再び立ち上がり戦闘をする。気がつけば自分も撃っていた。

ついに兵士は一人になり、ミクがそいつに銃剣を刺すと。辺りは静かになった。

ミクは歌い始める。その歌は俺たちにとって救いとなった。地形を調べるのではなく、敵を調べるのではなく、俺たちを励ます歌。決して兵器なんかではない歌。

「救われたな蒼井」

隣で定本がささやく。

「まったくだよ。あいつ俺達を守るみたいなこと言いやがって。」

「結構喜んでるだろ？」

「へっ、まあな」

俺は正直に答えた。

昔ミクが言っていたように人間の感情は言葉なんかには表せない。
今の気持ちこそそれだと俺は思う。

だがこのときはまだあんなことが起きるとは思わなかった。

奇襲（後書き）

．．．短すぎる。

いくらなんでも短すぎると思った方も居るのではないのでしょうか？
本当にすみません。でも、温かい目で見てやってください。見てくれるだけで最高ですから。

読んでくれたらありがとう

山の中で

ここは中国山地の山の中。あたりに人の気配などなく、居るのは俺達第四特殊対テロ小隊の6人とミクだけであるはずだった。

テロ組織の攻撃を受けた俺達は、一時的にここに非難するという事で居るのだ。なのに今攻撃を受けている。敵はSEALSと呼ばれるアメリカの海兵隊。それも米軍の中でも特に優秀とされる部隊だ。そもそも何故米軍と俺達は戦うのかが分からない。

しかし今回もそんなことは言ってはられない。

いくら日本のエリート隊員である特殊対テロ部隊であろうと所詮は子供。その力などSEALSにとって他愛もない。

今のところなんとか死者はいない。全員木に隠れたりと絶えている。ミクは一人歌を歌い俺達全員にデータを送る。腕についている携帯型の戦術インターネット管理機に敵の配置についてちゃんと写っている。そこに写る敵は多かった。ざっと見て20人程度。

俺は隠れながら小銃を撃つ。

「ふざけてやがる。なんでシールなんか居るんだ!!」
隣に居る定本は愚痴る。

「知るか。そんなことより今の状況を良化させろ。」

敵の首に銃弾があたる。これで3人のSEALSの隊員が死んだと見ていい。しかし向こうはプロだ。こちらに向かって閃光手榴弾を投げる。

「目をつぶれー!」

一瞬耳がおかしくなるような音がして、その後キーンと耳鳴りがした。

何とか耳鳴りが少しおさまると、向こうに居る仲間の一人がグレネードを撃たれ、機と一緒に吹っ飛んだ。

「大丈夫か、恵ー!」

返事はない。死亡か気絶。死亡のほうの可能性が高いだろう。つ

まり仲間を一人失った。このままではもつと被害が増す。

やむおえずミクに攻撃してもらう。

「ミク！敵を攻撃してくれ！」

「了解。しかし戦術インターネットの索敵が狭まります。」

ミクは警告を残してどんどん突っ込んでいった。

ミクの登場に動揺したのか、命令なのか分からないが彼女に集中砲火する。だがアサルトライフルごとに電磁装甲は破られることは無く、そのまま敵に囲まれるような場所につく。当然囲んだ側は撃ちまくる。中にはジャベリンと言われるミサイルを持っている兵士もいた。しかしながらミクの次の行動で誰も撃てなくなる。

ミクは一人の兵士に近づくといきなりMINIMI機関銃を自分の顔の位置に持つてきて、そのまま勢いよく兵士ののどに刺す。MINIMIは口を通つてのどをつき抜け、背中から銃口が現れる。刺された兵士はもがきながらもまだ生きてる。必死にミクをどけようとするが痛みのできで力が入らない。そしてそのままミクは兵士ごと動かして次々と殺していく。ジャベリンを持っていた兵士はやむおえないと判断して撃とうとする束の間に顔面に何発も銃弾を受けぐちゃぐちゃになる。囲んでいた兵士の最後を殺すと、最後にまだ何とか生きている目の前の兵士心臓を銃剣で刺した。

俺は何も言わなかった。少なくとも今ので残る兵士は5人以下となった。どんなに悲惨な殺しをしようと、今は生きなければならぬのだから。

状況的には良くなった。向こうもミクに怯えている様子だ。ついには彼らの得意である水中に逃げようとしていた。

「撤退していくぞ」

定本の嬉しそうな、希望あふれる声が響いた。

終わったのか？俺には疑問がある。ここまでしてこれで終わりだろうか。いや違うはずだ。

答えはすぐに教えてくれた。

空から飛行機の音がする。そしてミクが告げる。

「F - 22、2機接近中」

「F - 22だと!？」

F - 22といえば世界最強のステルス戦闘機。その最強さは実にF - 15の6機に値するといわれる。しかしこれは単純な計算だ。要するにF - 22の装備であるAIM - 120というミサイルが6発あるからだ。つまり7機以上いてなんとか対等に戦えるということ。しかしながらこの戦闘機は機動も優れている。とてもじゃないがF - 15ではかなわない。なら歩兵では？破壊するのは不可能と
いっている。

俺は定本の持っていたハンドアローを空に向ける。

「どこからだミク!？」

「11時の方向です。到着まであと10秒、．．．5、4、3、2、
1、0」

上空からあの特徴的な平たいウェポンベイが見えた。ハンドアローを撃とうとするが、うまくロックされない。そうしている間にF - 22はウェポンベイを開く。中に投下爆弾がある。もう無理だと判断してハンドアローを投げる。

「撤退――――！！」

投下爆弾が投下された。

山の中で（後書き）

SEALS好きです。追い込まれたら海に逃げろ、なんて言われている海軍特殊部隊最強の部隊なんですよ。

でも、アージェント・フューリー作戦で四人のSEALS隊員が溺死しているらしいですね。まあ、情報の不手際や経験したことが無い事をやらされたので、四人で収まったのがいい方なのかも知れませんかね。

読んでくれたらありがとう。

陰謀

目的は果たした。あとは直接死体を確認し、07式早期警戒管制兵を回収する。F-22の爆撃から10時間経過した。人なんてあのあたりにいないからまだマスコミもこない。来たとしても『実験中の無人偵察機が爆撃ごと墜落した』などと言っただけだ。

私は現場に急ぐ。車は山道を登って行く。途中で道が無くなり護衛と共に歩いて向かった。

SEAL隊が海に逃げ込んだと情報があった。少しばかりあのかきは焦った。しかし保険と言う物はやはりつける物だ。その後高空で待機していたF-22は見事に爆撃してくれた。海上に演習と称して米軍の艦もある。今ごろ生き残ったSEALが乗っているところかもしれない。

それにしてもものどかだ。爆撃後だと言うのに鳥が飛んでいる。死など感じさせない。空気もきれいだ。東京暮らしとなるとやはり空気が汚いのには慣れてしまう。昔はよく川で釣りをしたもののな。

しかしこの山道を歩くのは四十代後半の私にとって少しきつい。年はむやみにとるものではないな。

そんなことをのんきに考えていると一発の銃弾が護衛の頭を貫く。たちまち護衛6人が木に隠れ、私も拳銃片手に隠れる。だが敵はまるですべてを知っているように一人、また一人と殺していく。

最後の一人が殺されたとき、私の目の前に死んだはずの人間が銃を向けて立っていた。

「銃を置け。鷹川担当官。」

俺が起きたとき一瞬何がどうなったか分からなかった。そしてすぐに思い出し思わず目を開ける。体に何かが抱きついていて。見るとそれはミクであった。

俺はすぐにミクを離させて状態を見る。酷かった。耐熱性のある

服は爆風であちこちが破れはだけている。流石に耐熱人口皮膚まで上げれることは無かったが、てにあたったはずのM I N I M I 機関銃も無い。

ミクの電磁装甲なら十分こんなことにはならなかったはずだ。しかしミクの電磁装甲は起動していなかった。全ては俺を守るためにミクは何とか再起動することが出来た。

「07式早期警戒管制兵、初音ミク起動。右腕、後部に損傷があります。また装備は一切ありません。」

「・・・他に生存者は？」

「定本一曹を込む二名です。」

はじめ六人いたはずだ。つまり合計で三人が死んだ。

「・・・なぜ俺を助けた。」

「隊長だからです。」

「・・・本当か。」

ミクは黙り込む。

「違います。私の感情です。」

「？」

「私の中での記憶はあなたで埋め尽くされています。原因不明ですが、私はそこから死んで欲しくないと判断し、救出しました。」

俺は驚く。もうこいつは完全に機械ではない。一人の人間のような物だと確信する。

「敵が来ます」

唐突な展開にも程があるが、そんなことで何とも思わなかった。

俺達は次々に殺していく。そうこいつらを雇っている奴がこの陰謀の原点。そしてそれが誰なのか既に浮かんでいた。間違いなく担当官。

「お前はまず、俺達にミクを送りつけた。」

鷹川は黙って聞く。

「そして日本のテロリストにミクの性能を見せつけ、さらに次はア

メリカだ。」

イラク戦争での実験。作戦自体がミクにとって甘いところからアメリカも大した物ではないと予想したのだろう。だがミクは人間ではまず不可能なことをやってしまった。そのせいでアメリカはミクを恐れたのだろう。だから攻撃を意図した。

「これらのせいでまずテロリスト達が攻撃してきた。そして次にアメリカ。こんなことが偶然なんていわない。なら誰がこんなことができる。答えは鷹川担当官、お前だ。」

鷹川は不意に笑った。下ろしていた銃をいきなり木に投げつけた。「そうだ、全ては私だ。テロリスト達に君達の居場所をもらしたのも、米国にミクの攻撃タイミングとそれによるミクの設計中止を与えたのも私だ。」

正直そこまでしているとはおもは無かった。

「ならなぜそんなことをした！」

「貴様らが邪魔になつてきたからだ。」

「なんだと」

「貴様らは優秀な兵士だ。他の部隊よりも優れている。しかし、そのせいで機密を知りすぎた。拷問にかけられたら即全てがばれてしまう。だからだ」

俺はキレた。

「ふざけんじゃねえ！どれだけ死んだと思う？今日だけで三人は死んだ。俺の仲間、いや家族だった。昨日まで互いに笑いあっていた家族だ。それがそんな理由で殺された……。お前達大人はいつも身勝手だ。俺の親は俺を捨て、お前達は俺達を兵士にした。俺達は道具じゃない！感情を持つ人間だ。」

そこまで言う俺は首根っこをつかんでいたことに気づく。同時に目から涙が出ていた。そして再び銃を構えて言ってる。

「お前を治安維持のため殺害する。」

周りの仲間を見る。ミクや定本、ついでに明口。全員ただこいつを見ている。俺もこいつを見る。

引き金を絞り、全ての終わりを告げた。

陰謀（後書き）

piaproでは、ここで一期が終了した、ということになっていました。

まさかの二期があります。

中二病全開の作品ですが、読んでくれるとうれしいです。

Second Operation

俺達は結局生き残り、再び第四特殊対テロ小隊が結成された。だが流石にそこまで早く兵士を送るのは大変らしく、部隊はミク合わせて六人となった。

あの事件、第四特殊対テロ小隊殲滅作戦の件は当然のごとくマスコミに発表せず、政府にも知られることは無かったらしい。俺達も謝礼という形で大金が払われ口止めをされた。

しかしながらあの事件で死亡した少年達は死体すら残らず、特殊対テロ部隊の管理機関は彼らに何もなかった。つまり死人は語らないと言うことである。だから俺は貰った金で全員の墓を作り彼らの死を忘れないようにとした。

ミクの方はこれからの実用化も踏まえて俺達が預かることになった。アメリカはミクの破壊作戦が失敗に終わったことが分つてもう諦めたらしい。

何がともあれ俺達は復帰した。またいつものように治安を守り、国の平和と安全を保たせる。それが俺達の使命である限り、俺達はそれを果たすだけだった。

俺はいつものように朝起きて、飯を食いコーヒーを飲みながら新聞を読む。光景的には生意気な子供かもしれないが、そもそも子ども扱いされるような身分でもないと思うながら読んでいる。しかし定本は他の隊員以上にテレビを見ている。しかもアニメ。この前俺が新聞を読んでいるとテレビの前で少女アニメのような物を見ていた。まあどうだっていいのだが。

ふと新聞を見て興味深い記事があった。

『米軍イラクから撤退』

こいつは興味深かった。今の状況からしてとてもイラクから撤退なんて出来るはずなのに一体何があったのだろ。詳しく読んで

みると、米軍の基地一つがテロリストにやられたらしい。これ以上の被害が危ないとされて撤退を決定した。

何ともそれなりの理由だが、このテロリストというのには疑問があった。果たしてテロでそこまで被害を与えられるだろうか？

しばらくコーヒーをすすって考えたが特に意味も無いのでやめた。ミクは今飯の片付けをしている。こういったことまで出来るのですごく助かる。今までは本当に大変だった。新しい隊員達はこの姿に驚いていた。

ところでこの前生き残った隊員の中で明口と言う奴がいたのを覚えていただろうか。あいつは戦闘員としての役割だけでなく整備員としても役割があった。そのためあいつはミクの点検等をしているのだが、名前の通り明るい口の奴で時々変なことを言う。ミクの教育に影響が出ないか心配である。

しかしだからと言って役立たずではない。彼も優秀な兵士である。

沖縄米軍基地

兵士達は何も感じずにいた。リーダーにも何も写っていない。辺りは夜の闇で暗くなっていた。兵士達は暗視装置を使って辺りを見渡す。何も無い。この基地に何も近づいてこない、はずだった。

それはいきなりだ。基地を囲む壁がいきなり壊された。その音に反応してたちまち警報機の音がする。何者かに侵入されたと言うことだ。

即座に十人の兵士が現場に向かい発煙筒を投げ小銃を壊した相手に向けた。発煙筒を投げる前は人間のような形をしていた物が見えた。だから小銃で対処できるだろうと思っていた。

だがそんな考えを覆すように煙の中から破壊した相手が出てくる。兵士達は実際のその相手の身長にすこし動揺したが即座に集中砲火をした。しかし相手はまるで銃弾が効いていない。かと思うといきなり一人の兵士を持ち上げて他の兵士達に投げる。

後からやってきた兵士達は腕についている銃のようなもので蹴散

らしてしまった。

そしてどんな壁を殴り壊し、本部まで行こうとする。そこでも兵士が対抗はするが一切通用しない。

ついに本部まで来るとそこにいた人間を機関砲で全員打ちのめした。

緊急と言うことで機密度が高い第四特殊対テロ小隊が急いで駆けつけた。UH-60ブラックホークと言う機体で沖縄まで来たがヘリの中でミクは伝えた。

「生存者はゼロです」

この言葉に俺達は驚きを隠せなかった。米軍基地がこんなにあつさりとやられてしまうなんて普通では考えられない。しかも敵は陸から攻めてきたと言う。一体どうすればそんなにやられるのだ？たとえ戦車が来ようと、戦闘ヘリくらいあつたはずだ。たとえ08式無人歩兵が攻めてきたとしても、いくら何でも無理がある。ミクでも無理かもしれない。

そんなことを考える内にヘリは着陸した。

基地は酷かった。壁がところどころに壊された跡があり、そこら中に人間が横たわっている。ヘリや輸送機は爆破されていたり、壊された壁のように破壊されたりと全てが使い物になつていなかった。「どうなってるんだ？」

俺は思わず声に出す。

「さあな。今まで数年しか戦闘はしてないが現役特殊部隊隊員が見てもびつくりだぜ」

定本は一言言つて死人を見た。その死人は機関砲のような大きい口径の銃を撃たれていた。

「ミク、どんな兵器で攻撃されたか分かるか？」

ミクは辺りを見渡す。ぼろぼろになった建物やヘリなどを見る。次に死人。そして俺のほうを向いて言つた。

「該当兵器、XUR-3と思われます。」

「XUR - 3?なんだそれ?」

「無人兵士の初期の物です。身長2・5メートル、それ以外のデータはあり知ません」

XUR - 3。俺はそんな名の兵器を知らない。それに無人兵士にしては大きすぎる。普通は人間のちよつと背が高いぐらいだ。こいつはそれを完全に超えている。一体どんな物なのだろう。

俺はこのことを報告書にまとめあげるため基地をいたるところまで調べた。

Second Operation (後書き)

piaproでは、『The song is weapons
Second Operation』として投稿されました。です
ので、Firstは？という突っ込みは無しです。あつたら凄い勢
いで困ります。すみません。

読んでくれたらありがとう

行動開始

「これより本作戦を説明する。」

俺はブリーディングルームの前で立つ。明口がその近くでパソコンをいじっている。他の皆は座っていた。

「今回の目標はここだ。」

俺の目の前のホワイトボードに映像が映る。そこには地図が写され、拡大される。そこに俺の指が加わる。

「ここにある家を制圧する。この前の襲撃でおおよそ敵が分った。おそらくここに居る奴らに違いはないだろう。」

この前の襲撃の件。たまたまミクのデータベースにXUR-3強奪事件の様子があつたらしく、敵の武器や車の特徴が同一だったそう。

調べてみるとこの組織はやはり反米派の組織である。

「では行動説明をする」

全員がそれを聞いて顔を変える。

一步でも踏み間違えれば自分が死ぬ。逆に関係ない人まで巻き込んでしまう。この緊張感は何年やってもほぐれることは無い。皆はそういう顔つきだ。

「まず、今回はいつも通り夜間での作戦となる。暗視装置を忘れるなよ。作戦名はdevastate、荒らしだ。2100時、軽装甲機動車にて目標より1200メートル離れた場所で降り、07式早期警戒管制兵に状況確認して貰う。この目標はどうやら警備が半端無いらしい。この前の襲撃では、車の中にダネルMGLまであつたそう。この点から敵がどんな兵器を使うか分らない。」

ダネルMGLとはグレネードランチャーのことだ。米軍でも最近になって使い始めた銃だが、普通こういった兵器を日本のテロ組織などは持っていない。俺達を攻撃した銃も、見た感じMP-7サブマシンガンを使っていた奴が居た。何故こいつらがそんな高価な武

器を持っているかは分らないが、注意は必要だ。

「本当なら08式無人歩兵を使いたかったのだが却下された。．．影中二曹は状況確認後、どこか建物に潜んで狙撃をしてくれ。なるべく早めに警備を無力化させる。それから俺と定本一曹が真正面から侵入する。残りは07式と裏側から侵入しろ。今回の作戦はXUR-3の情報を見つけることだ。見つけたらすぐに戻れ。以上だ。質問は？」

定本の手が拳がる。

「なんだ？」

「奴らの戦力はどのくらいなんだ？」

「分らない。その時にミクに確認させて貰うしかないな。状況によつては作戦内容も変わってくる。」

定本はそうかと言い座る。

他に質問する隊員は居ないようなので話をした。

「俺はたかが君達と変わらない十五才の小僧だ。それでも隊長として、全員を帰還させる。一人として残さないつもりだ。俺に不満があるかもしれないが、俺は精一杯やる。それだけは覚えておいてくれ。以上だ」

今回が第四特殊対テロ小隊の再編から初めての作戦となる。互いに信頼を築いたつもりだが不安がある。不安ばかりでは作戦なんて言っていられない。だから精一杯やった。少なくともミクはかなりそういうもの築いたはずだ。彼女は兵器として俺は見ない。感情を持つ地点でそんなことはしてはならないと思っっているからだ。それにそれで隊員達の気が滅入ったら困る。

全員そういった物を築いてみると、俺は信じた。

全員の銃に暗視装置が付いていた。そして暗視装置つきの重そうなヘルメットも。

装甲車の中は緊張感溢れていた。誰も話そうとはしない。いつものことだ。

「到着しました。」

「ミク、音響リーダーを展開！」

「了解しました」

ミクと俺達は外に出た。黒い迷彩服が夜の闇に溶け込み、自分達を隠した。

歌い終わって今の状況を確認する。予想通りだ。

「デバステイト実行！」

影中が狙撃銃を持って走っていった。俺達も二手に別れて走る。

「たく、敵さんは多いな。」

走っている時に定本が言う。よく走りながらそんなことを言われると、別の意味で感心する。まあ元々こういう奴なのだ。正直緊張がほぐれていい。

「当たり前だろ。俺達の殲滅に失敗したんだ。警備を固めるだろ。」

「だろうな。たくよー、俺は今日のアニメ見たかったのに！くそつたれがっ！」

「録画しろバカ！」

こいつのアニメ好きには呆れる。全く何をやってるんだか。

そんな下らない話をしていると、白く写る暗視装置が敵の警備を写した。四角い箱型の特徴的な銃を持っている。最新型の銃だ。

更に一人一人暗視装置までつけている。人気も少ないここではこんな人が居ても気が付かないのだろう。もしかしたら気が付く前に殺しているかもしれない。

もうすぐ狙撃が始まるはずだ。俺達は影で目標を見ながら頭の中で確認する。

すると一本の光線が一人の警備兵を貫いた。慌ててもう一人の警備兵は隠れるがそれは遅く、再び光線が貫く。それを合図に俺と定本は真正面に向かって走る。玄関から侵入するつもりで行くが、やはり鍵がかかっている。それもデジタルな鍵であった。しかし少し旧式のタイプらしく、場合によってはC4で爆破するつもりだったがその必要が無くなった。

「ハッキング頼むぞ、ネーター2。」

ネーターとは、俺達部隊のコードネームである。今までそうだったことは普通に名前を言っていたが、やはり危ないだろうと上の奴らが考えて、コードネームを使うようになった。自衛隊ではこういったコードネームを使わないが、特殊対テロ部隊ではこういったコードネームを使う。この場合ネーター2は定本のことだ。

定本は腰にあるバッグから機械を取り出して開けようとする。しばらくして開けた。

そして俺と定本は同時に中に侵入する。流石に敵も侵入に気が付いたらしく、サブマシンガンを持ってこちらに向かってきた。それを俺達が一瞬で無力化する。

だが敵はかなり多くこちらに向かっているらしく、危機を感じて玄関近くの部屋に左右別々に待避した。

「こちらアルファ、侵入した。ブラボーは侵入せよ。」

『了解しました』

無線を通してミクや明口達のブラボーチームに伝える。

俺達がこうやって応戦すれば、反対側の戦力は確実に減る。単純だが、日本のテロリストなら十分だ。

それにしてもここに集まる敵は多かった。先ほどから、壁が壊れるくらい撃ってくる。それでも俺達はサブマシンガンで何とか応戦する。

定本と俺の目が合う。それは3秒前のカウントダウンの合図だ。

頭の中でカウントする。そして同時に身を出し、俺は右側の敵を撃ち殺し、その反対側を定本が殺した。

「はっ、いつになっても変わらないぜ！」

そうやって余裕を定本は見せて手榴弾を取り出す。いや正確には手榴弾ではなく、催涙弾だ。これは非殺傷兵器で、このスプレーにも似た手榴弾から煙が出てくる。その煙を食らうと涙が止まらなくなり、一時的に敵は無力化される。

「マスクの準備はオーケーか！？無理なら泣きながら失せな！CN

弾、投擲ー！」

敵の密集した場所に催涙弾を投げる。たちまち敵は回避しようと必死になるが、当然のごとく狭い室内で回避できるわけが無く、逃げようとした奴らはガスマスクを着けた俺達に頭を打ち抜かれる。

ついにここは誰も居なくなり、俺達は身構えながら部屋から出る。

「玄関、クリア」

通信から玄関が無力化されたのが分った。だが今はそれどころではない。

裏側から侵入しようとしたが、庭に敵が居てとても進めなかった。明口は自分の弾薬がもう残り少ないことが分っていた。ミクはM I N I M I 機関銃を使っていたが、やはりそちらも弾薬が少ないらしい。他の隊員達もそうだった。

敵が多すぎる。

近くでグレネードが弾ける。何とか全員回避した。しかしまたグレネードが来る。これではらちがあかない。

その時、ミクが提案した。

「私が庭に侵入します。援護射撃を行ってください。」

その意見は大いに結構だが、万が一のことを考える必要がある。

敵はM79などの旧型グレネードランチャーではなく、最新型のダネルMGLを使っている。いくらミクの電磁装甲でも、もしかしたら危ないかもしれない。だがそうせざるおえない。

「分った。援護してくれ！」

明口は身を引き締める。そしてミクは走っていく。その影響で、驚いた敵が立ち上がり、グレネード撃とうとする。しかし、援護射撃をする弾丸の雨を食らいぐちゃぐちゃになって倒れる。それを合図に敵はミクを狙うようになる。だがミクは、攻撃しようとする目の前の敵の顔を思いつき殴り、顔をふっ飛ばさせる。そのせいか、敵は感情的になり立ち上がり始めた。それは援護射撃にはもってこいの的となり、一人、また一人、と倒れていった。

「庭、クリア！これより中に入る。」

ミクがドアをぶっ壊し、中に入っていく。隊員達はそれについていく。

部屋を一つ一つ見ていき。資料らしき物があるかどうかを確かめる。だがその作業はあまりにも遅い。

次の部屋に入ろうとすると、中には一人銃を持った男が居た。即座に銃弾を食らいその男は倒れる。すると辺りが静かになるのを感じた。

右腕の携帯端末にある戦術インターネットを見ると。敵は全滅していた。つまりはここは既に制圧していたのだ。

『資料を見つけた。アルファに全員集まれ。』

無線に隊長の声がした。

行動開始（後書き）

ちよつとはまともになってきたかな？まあそんな進歩はありませんね。

読んでくれたらありがとう

大量の武器

そこにあつた資料に俺は驚きを隠せなかった。

テロ組織の建物を制圧し、一度全員集まつてこの部屋を調べているのだが、驚く文章は山ほどあつた。

「おい定本、これどう思う？」

定本は俺の持っていた資料を取り、それを睨むように読む。そこにはこの武器について書いてあつた。

「おいおい、まさかこんなことになつていたとはな．．．」

あらゆる最新兵器。今ここに倒れているテロリストの手に握られているそれは国が支援したと書いてある。つまりどういふことかという、この組織は国と何らかの繋がりがあるということだ。

「ダネルMGLやプロジェクト90だけじゃない。G36まであるぞ。ジャベリンみたいなミサイルもだ。ここはなんかの傭兵組織か？」

深刻そうに言った。確かに、G36のような最新の小銃があるのはまだ分る。しかし、ジャベリンのような対戦車ミサイルは一体何使うのか分らない。日本でそんなテロを起こそうとしていたのかもしれない。だがその可能性は無いとは限らない。国がそんな武器を支援したのだ。もしかしたらテロを意図していたのかもしれない。

ここの中心人物はミクが部屋に入る直後に殺したらしく、ここで拳銃片手に横になっている。

「本当ならここのお偉いさんをとつ捕まえて、そのままミクちゃんの色気拷問といきたかつたんだがな」

定本が冗談めかして言う。ミクはちよつと人間が頬を染めた時みたいにした。

「お前はミクの色気を見たいだけだろ。」

「まあな」

このとき微妙に他の隊員達も鼻のしたをのばしていたことは内緒

だ。

「ともかくこれは異常だ。国が支援するなどありえないぞ。」

「ああ」

国が背後にあるということは、XUR-3の強奪も意図されていた可能性が高い。となるとこの前の米軍基地攻撃は間接的に国がしたことになる。これがどういうことか。それは場合によっては日米で戦争になりかけないことだ。

この資料の他にも色々で来そうだった。

しかしXUR-3についての文章が見当たらない。

やはり無いかと諦めたそのとき、明口が紙を持って手を上げた。

「見つけたっ。これでミクちゃんの色気が見れる！」

「いつはじめたそんなゲーム！」

定本が怒った口調で言ってる。俺は少し今の光景を見直し、ミクもちよつと見とれたが、

「俺にも見せるよ、色気。」

この言葉で酷く後悔した。

それはともかく明口の見つけた資料を見てみる。見ると『XUR-3は稼動可能』と書いてあるだけであつた。やはりXUR-3はこの組織が持っていたことがこれで証明されるが、どうやらある場所を書いてないらしい。

俺はその文章と先ほどの文章をしまうと、ミクははつとした。

「こちらに多数の武装集団が来ています。距離はまだ2キロです。」

「分つた。全員戻るぞ。」

俺は白い粘土状の物をたっぷり貼り付けて部屋を出た。

その後、装甲車に乗った時にはすでに黒い雲が空に上がっていた。

このことを鉄西担当官に伝えた後、俺は少し考えた。

一体この件の主導者は誰なのか。とてもじゃないがあのテロ組織の中心人物ではない気がした。

そしてこの件の目的が何なのかも考えた。

本来、テロと言うのは何かを訴えるための行為だ。だとすると今回は一体なんなのだろうか。米軍の撤退といえはそうにも見えるが、果たして国がそんなことをわざわざするだろうか？もつと別にあると思う。

考える場考えるほど謎だ。

そんな時、陽気な明口がノックをして入ってきた。

「なんだ？」

愛想よく言っていると、向こうも笑顔で話す。

「今つて、12月じゃないですか」

「ああ、そうだな。寒くなってきたしな。」

「12月つてやっぱりクリスマスじゃないですか」

「・・・まあな」

すでにこちら辺で予想はつく。

「それで、たまにはクリスマスパーティーなんてどうかなって」

まあ正直断りたくなかった。しかし目の前の作戦があつた。でも俺はこういつてやる。

「一人でも・・・一人でも欠けたらやめる。その条件でいいな？」

一人でも死んだら許さない。俺はそう言つたつもりだ。

「・・・もちろんですとも！・・・ところでこの歌覚えてくれませんか？」

明口は楽譜を出した。

「これは？」

「ミクとのデュエットです。」

「なっ！」

「もう逃げられませんよ。ちゃんと覚えてください。それに」

俺のところにより小声で喋り始める。

「ミクの過激で可愛い姿の隣で歌うんですから」

「なっ！お前っ」

「ではよろしくお願いしますー」

すばやく部屋を後にされた。そして不意に俺はミクの破廉恥な姿

を想像してしまった。

何かもあれ、楽しみが増えた。そしてそれまでにはこの任務をこなさないといけないと思った。

大量の武器（後書き）

全然進歩していないことに気がついた・・・。

このころの蒼井くん達は89式小銃を使用しています。

読んでくれたらありがとう

獣の雄叫び

俺は情報を受けた。

『XUR-3の場所が分かった』

鉄西担当官からそう言われた。俺はどこからその情報を手に入れた聞いたが、独自の方法だと言った。まあ教える必要もないので当たり前だと言えば当たり前だ。しかし、それなりに調べていた俺にとってそれがどこからの情報かは分かっている。

だからこそこの作戦は信用できるものだった。

UH-60ブラックホーク

ヘリ二機が空中を飛ぶ。行く先は、中国山地の日本海沿い。そこにセーフハウスのような物があり、そこが敵の施設だと言う。

偵察人工衛星がない日本では、そこを見ることができず、インターネットを通して見るしかなかった。そのためあまり詳しいことが分かっていない。話によれば地下があると言う。

今回の作戦は重要性が高いため、08式無人歩兵15体が導入された。そのお陰で俺達部隊はこのブラックホークといわれるヘリに乗り、代わりにCH-47Jチヌークと言われる大型の輸送ヘリに08式が乗っている。とは言っても、ブラックホークの操縦はこの08式に任せているので全部がチヌークと言う訳でもない。

「くそ、またアニメが見れねえ。この前ブルーレイで録画予約したら予想よりも長く作戦続いて見れなかったんだぞ。くそだぜ」

定本はヘリの騒音に負けない声で愚痴る。

「くそくそくそするせえ。もう三日分録っておけ。」

全員の緊張がほぐれる。今のうちにリラックスしておかなければならない今にとって、それは重要な役割を果たした。

明口はミクの顔を触りながら話し始める。

「俺はもうこのミクちゃんが居ればいいけどな。」

「馬鹿！俺はミクだけじゃ足りないんだよ！」

「私は足りないのでしょうか．．．。」

ミクは少し落ち込む。それに定本は気付かず、知らぬ間に追撃を加える。

「うん、具体的には胸当たり。」

さらに落ち込んでしまうミク。確かに、ミクの胸は無い訳ではないが、大きい訳ではない。まあ案外俺はそのくらいのちょうどいい程度がいいと思うが。

「おい定本！ミクが落ち込んだじゃねえか。」

「ごめん、ミク。でも俺は大きい方がいいんだ！これは断じて変えられない！」

この会話を谷崎達が笑いながら見ていた。その時だ。

「Missile coming soon！（ミサイル接近中）」

08式の女声が聞こえる。電話の時報の時の声のようだ。だが今は時間ではなく、危険を知らせた。

俺はすでにこうなると分かっていた。だからこそ作戦内容に、『ミサイルが来たらすぐにヘリを出す』という項目を付けていた。

08式を含む全員がヘリを脱出する。パラシュートを開き無事に着地。それと同時にヘリが爆発するのが聞こえる。

「チーム、目的地に」

作戦通り目的地に向かう。ここからそう遠くない。だが走って向かう。

ミクが音響レーダーを展開させた。やはり警備が固い。施設の屋上には狙撃手、周りには警備兵。ゲリラ組織よりも警備がしっかりしている。武器も最新鋭だ。腕にある携帯端末機はそれぞれの兵士の武器を表した。定本はそれを見て俺に言う。

「この前の資料以上だ。装備が凄すぎる。てっきりG36か、なんかだと思ったらM8だぞ。まだ試作段階のアサルトライフルじゃねえか。SFCRなんて聞いたことないぞ。」

M8というのは米軍が採用しようとしている小銃の一つだ。SF

CRもそれにあたる。だがこんな兵器はまず普通には手に入らない。やはり裏に国がある。

「ああ、マジでな。俺達の89式小銃じゃ相手にならないかもな。」

「まあ、銃なんて撃てればいいんだ。問題は使い手だからな。」

影中が狙撃位置に達し、うつぶせになる。俺たちも構えながら歩く。08式はゆっくりと歩く。

影中の狙撃と共に戦闘は始まった。

俺達人間は木に隠れたり、近くの岩に隠れながら撃つ。だが08式はお構いなく撃つ。

俺はグレネードを投げたりと必死に戦闘する。撃った弾丸が敵の頭に命中。敵は俺をターゲットにする。それをほかの隊員たちが狙う。

「ミク！状況は？」

「こちらが優越しています！ただし敵の数が多いです！」

その通りだった。さっきから撃っているのに全然減らない。

無線に声が入る。

「こちらネーター3、ネーター5が撃たれた！」

ネーター3とは明口のことだ。そして撃たれたネーター5とは谷崎。つまり谷崎が撃たれたのだ。

「ネーター5、どこを撃たれた！」

「足です……。」

「出血は？」

「大量です……。動けそうにないです……。助けてください！」

普段愛想よく接してくれる顔の谷崎が弱弱しく言う。それを思うと心が痛い

「ネーター3、救助します！」

「ダメだ！敵は無力化できてない。今行けばお前が死ぬぞ！」

「でもネーター5が……。」

「お前が死んだら元も子もない！敵を無力化しろ！」

俺は谷崎を見る。岩のところで倒れている。だが何もできない。

ついに敵は退避していった。無力化したと言う事だ。明口は急いで谷崎に手当をする。08式が施設に近づく。

「こちらに何来ます!」

ミクの声が轟く。その瞬間地面から何か巨体が出てくる。その際、轟音が地面揺るがす。

「全員、岩に隠れるー!」

俺も飛び出して近くの岩に隠れる。

砂ぼこりから出てきた巨体は皆始めて見るものだった。しかしそれが何だか分かった。

XUR - 3

この文字が全員の頭に出て来た。

実際はミクのデータよりも大きく、予想をはるかに超える凶暴さだった。

「グオオオオオオオオオオ!」

その姿まるで野獣である。とても機械とは思えない。

次に聞こえてきたのは大きな機関砲の音。それと共に08式が倒れていく。

08式の耐久力が高いはずだ。ミクに劣るとはいえ、電磁装甲を使っいて戦闘機に積まれているM61機関砲を20発受けても耐えたと聞いている。なのに瞬殺されている。

XUR - 3は一通り撃つと、今度はまだ稼働中の08式の頭を片手で持ち、もう片方の手を足に持ってきて上半身と下半身で分けてしまう。

それが終わるとなぜか海に入って行ってしまう。あれはいつたい何なのかと、今頃思ってしまう。それはほかの隊員達も同じのようではばらく沈黙する。

俺ははっする。そして命令を下す。

「施設の制圧を急げ! なかに重要人物がいるかもしれない!」

俺たちは明口と谷崎を残して建物に入る。

「手を挙げる！」

部屋に入ると、白い服の女性がいた。どうやら技術者だ。俺達は銃口を向ける。

「この技術者か？」

意外にも手を挙げさせられながらも平然としていた。

「そうよ。武器は何もないわ、手を下してもいいかしら。」

「・・・いいぞ」

これでXUR-3の情報がやっと手に入る。陰謀めいたこの現状から救われるかもしれない。

獣の雄叫び（後書き）

なんだか・・・投稿のペース早過ぎる気がするのは私だけでしょうか？

まあ、バックアップを投稿しているだけなので、仕方ありませんね。

それにしても若気の至りってなんだか怖いですね。

読んでくれたらありがとう。

人口知能の代用

「XUR-3について話してくれ。」

この女の技術者を捕虜にするなりいきなり俺は聞いた。

正直に言えば、今の段階で言う必要はなかった。それは上の連中のすることだ。だがどうしても聞いておいた方が有利であった。

「あまり態度が大きいのは好きではないわ。」

こつちを見るなり微笑してくる。27歳くらいの女性のほほ笑みは少し怖かった。

「す、すまない。じゃあ、名前を・・・」

本当なら俺から言うべきだろうが何しろ機密事項だ。自分の名前はあまり公開できない。

相手はそれを察してくれたらしく、また微笑みながら『加奈子よ』と言ってくれた。なんともありがたい。

「ああ、それでXUR-3のことなんだが・・・」

「分かってるわ。でも、正直教えないといけない義務はないんですよ?」

「・・・ああ。」

やはりそれを言われると痛い。だが俺の予想を反してくれる。

「正直でいいわ。年下なだけ可愛げがあるわね。私、ここの連中にはうんざりだったし、いいわ。まずXURについて教えてあげる。」
子供呼ばわりされた気もするが、まあ変な意地もないから聞くことにする。

「XUR、つまり無人ロボットの開発計画は最近だわ。そうね、私はまだその時いなかったけど、約15年前に計画されたらしいわ。」
「誰によつて?」

「情報局の西原よ。」

そう、この名前は既に聞いていた。XUR-3を調べに行った時、その責任者がこの西原というやつだ。

「話を続けるわね。当時、まだ人工知能が未完成のままでどうしようか悩んでいた。仕方がないので自分たちで何とか作るうとしたわ。それがXUR-1。」

加奈子は座っていた椅子から立ち上がり窓を見る。そこに何も意味はないが、破壊された08式や死んでいた兵士たちを見る。

「当然の如くXUR-1は失敗。人工知能を諦めさせるいい証拠となったわ。そして、機械がダメなら人間という考えが出たわ。」

「人間？」

「そうよ。つまり人間の脳を機械に埋め込むの。」

驚きが隠せない。だが多分本当だろう。さつきXUR-3が野獣のように声を出していたのは機械ではないからと考えた方がいい。機械なら無駄なことはない。

「以外にもこの方法は名案だったらしく、XUR-2はほぼ成功したわ。でもこいつは武器を積んでいないわ。ちょうどその時は研究員の一員になったんだけどね、武器を搭載させ、完璧な兵器として生まれ変わらせるのがその時の課題になったわ。武器は、人間ではまず使えないものを搭載させたわ。」

「例えば？」

「高出力レーザーや40mm機関砲。その時はそんなもん。」

両方とも強力な兵器だ。高出力レーザーは米軍が以前、人工衛星の破壊を目的に実験された。40mm機関砲と言えば、AC-130というガンシップに積まれている兵器。どちらも人間ではまず撃つことはできない。

「でもXUR-2では話にならなかったわ。耐久性がなかったの。そのため新たなものを作った。」

「それが、XUR-3？」

「そのとおり。当時極秘で開発された電磁装甲が使われたわ。そして武器も対戦車ミサイルやら対空ミサイルやらが積まれた。」

窓を背後に話していた加奈子は、今度はまた座る。技術者というのはこういった人ばかりなのだろうか？

「問題はここからよ。この兵器が果たしてどれほどまで強いのか実験した。正直、西原には大量生産の文字がなかったから、一体になぜか多くの予算が出されたの。だからかなり強くて当然だった。この実験が初めての起動で、私たちは目を見張ったわ。実験の内容は90式戦車の120mm滑空砲を受けて壊れないかだった。」

「結果は？」

ふつと笑って答える。

「何発当てても耐えたわ。でも、そのあとが酷かった。」

「何が起きたんだ？」

「暴走よ。元々の脳が狂ってたのね。XUR-3は暴走し始め、殴って90式を壊したわ。」

90式戦車はセラミック装甲を使っている。そんなたやすく壊れるようなものではない。

「それを機にXUR-3は起動しないと話し合っていたわ。でも運送中、この連中が襲ってきた、私とXUR-3を奪った。その後はここにずっと待機させられたわ。と言っても3年くらいなんだけどね。その間XUR-3はかなり改造されて、今では巨人よ。ちなみに、XUR-3の名称は知ってる？」

「いや」

「そう、教えてあげるわ。ゼウスよ。ギリシャ神話における最強の神。ぴつたりだと思わない？」

「同感。それより弱点はないか？」

また加奈子は立ち上がる。今度はついてきてと手招きされる。

施設内は隊員やミクが調べている。その中で一番隊員がいた広い地下に連れてこられた。

「ここにさっきまでXUR-3がいたわ。私を守るより先に連中はあいつを移動させるのに必死だったけど。」

「どこに向かった？」

「沖縄の米軍基地よ。多分、一週間ぐらいエネルギー補給をするから、あと八日後には攻撃をするわ。」

なんてことだ。結局阻止できなかった。だが諦めた訳ではない。

「弱点はあるのか？」

「弱点のない兵器はないと思うけど？」

「まあ、そうだな」

「問題はいかに弱点が困難なものか、よ。さっき言ったとおり、ゼウスの電磁装甲は最強よ。電磁装甲の弱点である爆風系統の攻撃も、それを見越してチタンを使ってるから無理よ。」

「ならどうすれば？」

深刻そうに言っていた加奈子の顔が笑い顔になる。

「脳よ。人間のように、いえ人間よりも脳にダメージが加わればいいの。それと最新の兵器なら有利になるわ。ステルスとか。」

そこまで言うとし感情を変えた。

「設計図をあげるわ。」

その場にあつた設計図を渡す。

「いいのか？」

すると、ミクの方を向いて話し始めた。

「ええ。あなたたちと、あの子ならやってくれそうなの。私の予感でしかないけどね。」

悲しそうに、だけど顔は笑いながら言った。

「私たちは封印できなかったけど、あなたたちならできるわ。」

俺たちは重い何かを背負っていたことに気がつく。

たくさんの技術者がこんなものの過ちに気がついた。でもそれはすでに遅く、封印しようとした矢先にそれは逃れられてしまった。それを今俺達が成す。

「ああ、絶対にやる」

「おいミクー。こっちきてー」

「はい。」

定本がミクを呼びつける。

定元のところに来ると。なにやら大きなマガジンのついた小銃が

渡される。

「M4A1ドラム式マガジンだ。MINIMIよりいいんじゃない？」

「はあ。」

そこに明口が寄ってきた。

「いやそこはやっぱりこっちの方が・・・」

何やら服をだす。どっから持ってきたんだ？と定元。

「そこにあった」

「このテロリスト、クソワロス」

「ということで、着てみてー」

「は、はあ」

ミクはせつせと着替える。もちろんその姿を見たかった二人だが、気が引けるので背中を向ける。

「着替えました。」

胸を弾ませながら二人は見てみる。

「こいつはいいぜ。ナイスワーク、明口！」

「あー、写真写真。」

「なんか、恥ずかしいのですが・・・。」

そこに蒼井が来る。

「撤収するぞってなんだこりゃー！」

そこにはメイド姿のミクがいた。しかもM4A1という米軍の小銃をもって。

加奈子が『あ、古くなった私の服』と言うがあまり返して欲しくはないようだ。

「またお前ら！」

「とか言ってお前も鼻血寸前じゃん！」

「鼻血なんて出てない！」

「このまま撤収でいいじゃん！」

この後、二人の攻撃に勝てないので仕方なくこのまま撤退しました。

人口知能の代用（後書き）

このXUR-3に積まれた脳は、サイコパスになった人間の脳です。それにしても．．若気の至り若気の至りって言っているのに一人の方がお気に入りに入れてくれるとは．．。いいのですかね？まあ、いいです。楽しんでください。楽しめるのなら．．。

読んでくれたらありがとう

秘策

俺は鉄西担当官に報告する。

「このXUR-3を破壊するのは、我々だけではまず無理です。たとえ07式が存在しようと、相手の電磁装甲は強力です。」

設計図を広げて説明する。

「弱点である脳は、ちょうど胸のあたりにあります。しかしそこを攻撃するには、チタンをも破壊するような強力な兵器が必要です。我々のような小隊では不可能です。」

これが調べた結果である。

劣化ウラニウム弾ですら通用しないこいつに、まして自衛隊の兵器を使う俺たちには勝ち目はない。

このままなら確実にXUR-3は米軍を襲う。そして基地の一つに死体しか残らなくなる。俺の言ったことは、それを黙って見る、ということだ。

米軍にこのことは報告すれば、まだ撤退するなり何なりの方法が浮かび上がる。ヘリかなんかで、今海にいるXUR-3を探し、魚雷を撃つこともできるだろう。だが、あくまでこれは日本が仕掛けたこと。XUR-3は日本の兵器で仕掛けたのは日本人。報告などできたものじゃない。今後の外交に関わるだろう。

しかし、テロを阻止するために編成された俺たちは、諦める気などない。

「戦闘機の支援を要請します。」

これができる最大の方法であつた。

第二特殊対テロ大隊なら、戦闘機乗りが数人にいる。俺たちがだめなら、他の部隊も参加させるしかないのだ。

鉄西は黙ったままである。

俺にはこの人考えていることが予測できない。いつも黙っている。冷静な外見に似合う性格であろう。この人の過去はこんな感じだっ

たのだろうか、たまに考える。いつも本当に生きていることが楽しいのだろうかと思わせるのだ。

しかし、鉄西は紙を取り出し何か書く。そして俺に渡した。

「F - 3をだす。」

「F - 3？」

この場合、F - 3とはF - 2の後継機のことであろう。だがF - 3はまだ完成していないはずだ。F - X問題がまだあり、ATD - X心神といわれる機体も、まだ全然完成していないはず。なのにとうして？

「防衛省が開発した戦闘機だ。報告ではステルス性を持った兵器には弱いとある。こいつはステルス機だ。まだ試作段階で正確にはY F - 3だがほぼ完成している。こいつを送らせる。」

ひとつの疑問ができるが、今は気にしないことにした。

なぜなら、俺は次の言葉に少し混乱したからだ。

「ただし、乗るのは第四特殊対テロ小隊だ。」

「え」

この一文字しかいえない。

俺たち部隊で戦闘機に乗れるのは、俺一人。

「待ってください！私の部隊には私しか乗れる人はいません！他の部隊にまかせ・・・」

「これ以上機密情報は流せない。」

一言で片付けられる。

しかし反論は無意味だ。その一言に一文字として間違ったものはない。

今度は俺も黙る。

そして、口を開いた。

「分かりました。できる限り、いえ全力を尽くします。」

また鉄西は黙る。

そこに俺は言ってる。

「しかし、これだけは言っておきます。貴方達、大人の陰謀で動か

されようと、私は一人として行かせはしません。　・　・　失礼します。

「

この部屋を後にする。そして走ってへりに乗り、作戦を伝えにく。多くの人の命と意思を守る作戦を　・　・　。

秘策（後書き）

すみません。更新遅れました。
若気の至りにも程ありますが、温かい目で見てくださいとありがたいです。

巨人の来襲

俺は新型戦闘機 F - 3 戦闘機に乗る。

STOLと言われる機能を持ったこの戦闘機は、いつも乗っている練習機とは違い短い距離で離陸する。

いつもなら、訓練として空の散歩を楽しんだ。

人類は空を飛ぶことに長年あこがれていた。それはどこの国であつても。

100 年程前、自転車屋をやっていたライト兄弟によって人類の夢がかない、人々はそれを、まるで魔法でも使ったかのように見ていたそうだ。

彼らライト兄弟は空にあこがれていた。自転車屋でありながらも世界で初めて飛行機を作ったのだから。

同じく俺も空にあこがれていた。幼いころからいつか飛んでみたいと思いつけた。だがそれは、目の前の現実から逃げたかったからだ。親と言うものから逃れ、自由な空に行きたい。そう願っていた。初めて飛んだ時の気持ちは今も覚えている。すごい。ただそれだけが心の中に響いてやまない。目の前には親もいない、規制もない、金もない、何もない本当に自由の空。それから空には飛び続け、その度に心が解放される。

今は違う。

これからやるのはそんな呑気なものではない。

仲間のため、過去の思いのため、多くの命のため、世間のため。

それら全てを背負って、俺は今出撃する。

「N a t o r i , t a k e o f f .」

あたりは暗い。午後5時を回っている。

この暗闇はいつもより長く感じるであろう。

ここの将軍、ロナルド・アンダーソンはイラついていた。

この前基地が短時間で壊滅したお陰で、周囲の沖縄基地は警戒態勢に入り夜間も起きていなくてはならなかったからだ。

イラクから一部が撤退している中、その陸軍がこの基地にいた。要するに、米軍は今回の件を重くみている。見ない方が不思議だろう。

かつてアンダーソンは湾岸戦争にも参加した。だがその時に比べると、今の方が酷かった。

「将軍警備隊から連絡が来ています。」

「繋いでくれ……。」

疲れ気味に言う。その声は50歳で比較的ぎつしりとした体の彼にはぴったりの低さだったが、やはり疲れを感じさせる。

『こちら警備隊。海に何か人間のような物を確認しました。』

ここから海と言うと、その近くには陸軍の基地があつたが、そこはこの前襲われた基地だ。立ち入り禁止になっている。そのためこちら側にはだれも近づけない。

「人間？」

『はい。かなり大きいです。全長4、5メートルあります。距離としては約1キロのところにいます。どうやら海に潜っていたのでしよう。あ、今腕がこちら……ぐおおおお！と、溶ける！熱い！熱い！』

いきなり管制室に悲鳴が響く。

窓からその方向を見ると、一本の赤い閃光が描かれていた。

「状況は！？」

無線が一気に押し寄せたようで、そこら中から声が聞こえる中アンダーソンは怒鳴る。

「警備隊に被害が出ています！目を焼かれてしまった兵が続出！」

別の声が横から入ってくる。

「巨大な人型が急速に接近しています！」

考える時間は与えてはくれないようだ。

「基地を攻撃したのは奴だ！ただちに全軍を起動させる。空中で待機しているアパッチはすぐに攻撃開始。イラク帰りの戦車隊もすぐに起動だ！」

「了解！」

AH-64Dロングボウアパッチは攻撃ヘリだ。空中の戦艦と呼ばれ恐れられるヘリ。その群れが、巨大な人型を襲う。

人型はとてつもない速さで基地に突っ込んでくる。そこにありつたけのミサイルやロケット弾を撃ち込む。そのまま向かって行って人型をスクラップにする予定だった。だがそんな簡単にはいかない。人型はいきなり立ち止まって腕を向ける。そしてレーザーを撃ち放ち、こちらに向かうミサイル等を全て無力化した。それだけでは済まなく、攻撃ヘリに搭載される、まだ撃っていないミサイルをピンポイントでレーザーで焼いてしまう。

「アグレッサ―1、アグレッサ―2、続いてアグレッサ―4が墜ちます！」

「オメガ2、4、5、爆破されました！」

このままではこの前となんら変わりはない結末を迎えてしまう。

「人型、さらに接近します。」

基地を見ると、柵を殴り飛ばした巨大なロボットがいた。

これが正体なのかと一斉に静まり返る。

「・・・エイブラムスの起動はまだか？」

「・・・は、はい！起動しました！」

「何としても滑走路の戦闘機を守れ！」

「了解！」

滑走路にはF-15イーグルなどの戦闘機がいる。この前までF-22ラプターの配備について話していたが、この状況なので、解決してから配備されることになった。

今そのF-15も起動している最中だが、やはり起動は戦車なんかに比べて遅かった。

M1A2エイブラムス戦車が起動し、基地の中を走っていた。そ

の戦車の群れと共にバツーカーや小銃を持った兵士も出てくる。

戦車も攻撃ヘリと同じく撃つ。しかし今回はかりはレーザーは通
用しないと分かっていた兵士たちは余裕の笑みを浮かべる。

だが、予想を裏切り、ロボットは戦車を殴り潰す。120mm滑
空砲が曲がり、車体が潰れる。今度はその戦車の近くにいた兵士を
持ち上げた。そして頭をひょいと掴みながら別の戦車に投げる。
悲鳴を上げながら兵士は戦車の装甲にぶつかり首と体が離れる。

「グオオオオオオ！」

野獣のような叫び。誰もがそれに引き下がった。

怯えた戦車隊は一斉に撃ち始めたが、かわされる。いやよく見る
と当たっている。だが、その痕跡どころか弾も見つからない。そう
こう考えていると、また一台が餌食になる。

兵士たちも必死に小銃などを撃つが全く効かない。拳銃の果てに
は殴られて五体がバラバラになったりする。

「戦車隊、次々に破壊されます！」

アンダーソンは冷や汗を浮かべる。

この基地が落ちれば、多分米軍は撤退を始めるだろう。

「・・・戦闘機はどうなっている？」

「滑走路を攻撃されています。ハリアー以外は起動不可能です。」

「ロボット、戦闘機に攻撃開始！ハリアー隊に深刻なダメージが加
わっています！」

悪い知らせの連続。

窓にはかなり大きな機関砲を戦車や兵士、戦闘機に撃ち破壊され
ていく姿があった。

最悪。

この言葉がここまでびつたりな時は今まで体験した事がない。
兵士が機関砲を受けて内臓や手足をまき散らす光景が目に入る。

XUR-3がここに来たことにより、反対側の警備がまるでなく
なった今、定本たちはそれを見ていた。

「ひでえ」

それしか言う事ができなかった。

この作戦。定本たちの役割はXUR-3をレーザー照準器で胸を照準することにある。従って何もできない。従わなくても何もできないであろう。

「定本副隊長、私たちは何もできないのでしょうか？」

普段無口の影中言う。やはり頭にきているのだろう。

「だめだ。お前がスナイプをしたとしても無力だ。ここでじっとしていなきゃ……。」

ミクが立ち上がる。

「私、行きます。」

慌てて近くにいた明口と谷崎が座らせようとする。だがミクの力には勝てなく、代わりに定元がミクの真正面に立ち肩を掴む。

「やめろ！いくらお前でも無理だ。」

「でも、黙って見てはいられません。」

「命令だ、従え！」

いつになく定本は真剣な顔をした。

「俺や蒼井、ここにいる全員がお前を大切に思っている。俺はな、あの時のように仲間を失いたくないんだ。」

殲滅作戦。あの事件でずいぶん仲間が殺された。生き残ったのはミクを込めて4名。あの事件後、蒼井は泣いていた。なんでもなと言つて、誰にも涙を見せないようにしていたが、ミクには分かった。そして蒼井は陰で泣きながら何度もごめんなと言った。明口や定本も泣いていた。

死体も残らず、葬式もできない。せめて成仏できるように墓まで作った。でも彼らは泣いていた。

あの時の光景を二度と見たくない。だがミクはそれでも言う。

「私が行かなければ、他の人が悲しみます。私は死神ではありません。人々を喜ばせるために作られました。だから行きます。絶対に帰ってきます。」

「ミク！」

銃を持ちミクは走り出す。

「くそ！全員援護だ！ミクを撃とうとする奴は片っ端から潰せ。コンサートの邪魔者は排除だ！」

「りょーかい！」

小銃を全員構える。

基地の状況は深刻だった。もはや何もできない。

そう思い始めた矢先に綺麗な歌声が聞こえてくる。その歌声に一つの単語が出てくる。

「ローレライ？」

全員が静まり返る。

ローレライ。日本が作ったという最新兵器だ。音によってすべてを悟る兵器。確か破壊された聞いている。

窓を見ると、場違いな可愛い少女がバツィカを拾って撃とうとしている。

「將軍、ローレライです。どちらを攻撃すれば？」

アンダーソンから見ればどちらも敵だ。しかし、ローレライはロボットと戦い始めた。それでもう答えは出た。

「最優先攻撃目標はあのか物だ。」

「了解！」

ジャベリンと言う対戦車ミサイルを足に向かって撃つ。

足は電磁装甲がなく、まともに食らう事を知っていたから。

しかしレーザーで焼き切ってしまう。

でもミクの計算どおりだ。

片手で持っていたジャベリンを捨て、MINIMI機関銃をレーザー銃に撃つ。するとレーザー銃が爆発をあげて落ちる。それは同時に電磁装甲の解除でもあった。

「グアアアアアア！」

「電磁装甲撃破！」

再びミクは歌い始め、今度はXUR-3の背中に乗り移る。そして頭の部分をばかばかと殴り始めた。一発一発が強力なため、頭はだんだん壊れていく。

なんとか振り払おうと腕で掴もうとする。それにミクは蹴りを加え指をふっ飛ばす。

「あら？意外と軽い作りですね。そんな子はママとお遊びでもしてもらいなさい！」

挑発と共に顔を蹴り飛ばす。

ミクは追撃をせずにその場を離れる。

XUR-3は頭がなくなり、何も見えなくなってふらつく。

「ネーター1。攻撃可能です」

あと500メートル。

真正面から蒼井は突っ込もうとする。

ミクの音響レーダーのお陰で正確に脳の部分をミサイルで狙う事が出来た。

「終わりだ。あの世でおねえだ！」

操縦桿のボタンを押し、すぐに機体を空中に向ける。

ミサイルは真っ直ぐと胸に向かう。かなりの速さで近づく。そして着弾。たちまちXUR-3はよろめくのをやめ、胸のところから爆発し、跡形もなく消え去った。

次の日の午後7時。俺は報告も込めて鉄西担当官のところに行こうとしたところ、ここに来てくれと連絡があった。そこに行ってみると、あまり人のいない居酒屋が現れる。ここにいるのだろうと思えば入ると、案の定そこで水を飲んでいた。

「座ってくれ。」

言われたとおりに隣に座る。

「ここは行きつけの店でね。飲むときはここに来るんだ。」

「はあ」

鉄西は早速注文をする。酒を飲まされるのではと思ったが、やはりそんなことはなくサイダーをくれた。

「早速だが。今回の件について、君の推理を元に話してくれ。」

やはりこの人は分かっていた。だからこそここを選んだのだ。もしもいつもの建物で話をしたら、監視の目が黙ってはいない。だがここも絶対にいるはずだ。

「いいのですか？」

「構わない。」

その言葉通り話を始めた。

「今回の件。まずあのテロ組織についてです。はじめに攻撃されたのは防衛省技術研究本部に行ったときでした。あの時からまず、テロ組織について調べました。」

鉄西はゆっくりと焼き鳥を食べる。つられて俺も一本食べてしまふ。

「ですが、敵の兵器が強力で、その兵器は国が提供していることが分かりませんでした。でも、国とついたとき、申し訳ないですが貴方を調べました。」

「ほう」

「結果やはり成果がありました。調べていく内にXURの提案者である西原という人物が出てきました。彼と対立をしていたようです。」

「ああ」

うなずきながらちびちびと酒を飲む。

「XUR-3のありが分かったとき、あなたに聞きました。どこかの情報ですかと。するとあなたは独自の方法だと言いました。だからこそ信じました。結果てきにそれは正しく、やはりあなたを疑いました。でも現地の技術者のことを聞いてやめました。代わりに西原を疑ったのです。」

「結果は？」

「黒です。今回の黒幕でしょう。決定的なのは、あなたが親米派で西原が反米派だったと言うところですよ。」

「なるほど。そこまで分かったか。」

俺は一息つき、サイダーを飲む。

「あのXUR-3。テロ組織は西原が作ったものです。つまり強奪したのも彼。」

鉄西はふー、と一息してから喋り出した。

「彼は危険だった。」

「は？」

つい言ってしまうが気にしないようだった。

「彼の考えはすでに分かっていた。私は当時情報局にいた。そして彼がこのプロジェクトを提案したときに予測がついた。必死に私は止めようとしたが無理だった。その結果特殊対テロ部隊の方に追いやられた。何とかしようと、あのテロリストに最新の武器を提供し、一時的にXUR-3を私の所有物にした。そして、F-22の情報と引き換えに、米軍のイラク撤退をアメリカに提供した。すぐに乗ってくれたよ。」

そこまで言っただけだった。要するにイラク撤退の原因のテロとはXUR-3だったのだ。

「どうしても、XUR-3を止めるには、日本がラプター同等の兵器を持たなければならなかった。そしてなんとかF-3が完成し、君がやってくれた。感謝してるよ。」

「はあ。ではひとついいですか？」

「ああ」

「西原の目的は何ですか？」

鉄西は焼き鳥を頬張る。

「日本の完全な独立。知っているかい？ジャパン州というのを。」

「いいえ」

「日本をアメリカの一つとして考えた言葉さ。彼はそれを嫌った。」

なぜかは知らないけどね、彼は日本が一つの国であることを証明したかったんだ。」

実際、今の考え方はそうなりつつある。自衛隊は世界でも通じる自衛力を持つ。なのにアメリカはなぜ沖縄にいるのか？そう思う人が少なくない。

俺は最後のサイダーを飲み切ってしまう。

「変わったな、蒼井。」

「ええあなたのお陰で。鉄西元教官。」

「仲間を大切にな。今日は久しぶりに酔いたい。私はこのまま飲むでしょう。」

「ええ。払っておきますよ。」

そう言って店の主人に金を渡し出て行った。

帰ってくるなり笑い声が響く。

中に入ると、

「さすがメイド服！いいなー」

定元と明口がメイド姿で料理を運ぶミクを撮っていた。

「おかえりです。蒼井三尉。」

谷崎が笑いながら言う。

普段なら怒るが今日はいいにしよう。

そう言って俺もミクのメイド姿を見ていた。こうして見るとなかなか似合うな。

「ミクちゃん。パン・・・」

「さすがに許さん、明口！」

「お前だって見たいんだろ！」

「ふざけんなー！」

今日も第四特殊対テロ小隊はそこにいる。

巨人の来襲（後書き）

これで二期の終了となります。

三期を投稿しようと思いますが、急に巡音ルカが登場します。しかし登場した理由については気にしないで下さい。すみません。それにしても．．．．．F-3、作るの早すぎない？

嫌な予感

あの事件から二週間が過ぎた。

XUR-3の残骸は米軍に回収された。

今回の黒幕である西原は逃亡したらしい。それと同時にテロ組織も解散となったようだ。

今後も西原の様子については怪しいと感じさせる。

でも部隊が一人として失われなかったことは喜ばしいことだと感じる。

俺はその点でほっとした。

だがその後、西原は08式早期警戒管制兵を奪った。テロ組織の生き残りを賭けた戦闘で、結果的にミクに大ダメージ加わった。しかしなんとか08式を回収することができ、テロ組織は完全に解散した。

いつものようにコーヒーを飲む。ブラックでかなり苦いがそこがいいと思う。ずずず、とすすする。

日曜で新聞がこないの仕方なくテレビを見る。だがテレビは定本領という領地なのでアニメを見せられる。

「お前さ、もつとニュースとか見ろよ。」

「見てるさ、ネットで。」

「どうせお前動画とか見てるついでに見るんだろ。」

「当たり前ーだろ」

まあ人の趣味を否定するのはあまり良くないのでそのまま会話を一旦やめる。

それにしても最近部隊が明るくなった気がする。いや賑やかになった気がする。

俺はミクを見る。何やら料理を作っている。感情プログラムってすごいな。

ちなみに感情プログラムはより人間らしくして、スパイ工作などができるようにしているため、あえて組み込まれている。

影中はいつもソファで寝ている。

問題は次である。

「もうだめ。しんじやうよー。」

弱弱しく谷崎が言う。その声と聞いたらもうない。本当に兵士なのかと疑問を持つくらいだ。

「弱音は禁物よ。お仕置きね。」

「わー！」

新しく来た巡音ルカという子は本当にすごい。あまりよく分からない俺が初めてDSというのを感じさせた。

今行っているのは拷問訓練だ。そのため谷崎が犠牲になっている。あれでもルカに気に入られているのだが、ルカは容赦ない。

「痛い！痛い！死んじやうよー！」

「可愛い可愛い谷崎くんを殺しはしないわ。いざとなったら全力で守るからね・・・。」

椅子に縛られている谷崎をそっと抱きしめる。そして谷崎は頬を染める。だが甘い。

油断していたせいでいきなり鞭で叩かれる。

「痛い！痛い！」

ついにルカは椅子ごと倒し。胸のあたりを踏みつける。

「ごぶっ」

「ここまでしてもまだ弱音を吐くようね。もしかして気持ちいいの？やだ、気持ち悪いわ。」

「き、気持ちよくなんか、ごぼっ」

「いいわ。もつと気持ちよくしてあげる。ふふふ」

怖くて俺は注意できない。

幸い谷崎もルカの愛情を感じているようだし、そつとおこつと、思った矢先に明口が谷崎たちのところに行く。何をするかと思えば・・・

「踏んでください、ルカ様！」

明口は横になり、谷崎と一緒に踏まれる。

もういいです。勝手にしてください。

「しょうもないな、あいつは。」

定本に言つと定本は息を荒くして見ていた。もういいです。勝手にどうぞ。

再び二人はテレビに視線を戻す。

すると、その画面には二人の学生がいた。主人公とヒロインである。定本は熱心に見ている。だが次の瞬間不機嫌にさせた。

『おい、ハル．．．番組の途中ですがニュースをお伝えします。』

「なにしてんだー！ー！！」

アニメからいきなりニュースに変わる。地震かと思って俺は見た。『さきほど、機関銃を持った車に高校生が撃たれました。車は今も走り続け、後を追うパトカーから逃げているようです。』

ヘリからの撮影が出てくる。そして撃たれた現場を写した。チラつと被害者が見える。そしてそのまま救急車に乗せられた。

「？」

被害者をどこかで見た気がした。

画面に被害者の顔が映り、名前の欄に？とついていた。

アナウンサーが身元が分かっていませんと言う。

「ぬおー！誰だこんなことした奴。ヘリをだせ！奴らを叩きのめしてやる！」

定本が小銃を取り出すので止めた。俺はそのとき思い出す。

「おい定本、この被害者第五特殊対テロ中隊のやつだ。」

「何？」

間違いない。訓練のとき会ったことがあった。

訓練から開放された谷崎が電話をとり俺に渡した。

「担当官からです。」

俺はありがとってかわる。

『私だ』

いつもの無口な性格に会う声で言った。その声は電話の奥の鉄西が何をしているかまで予測がつきそうであった。

「はい。」

『定本と来てくれ』

「分かりました」

「で、何ですか？担当官」

定本は不機嫌そうに言う。やはりさっきのことでイラついていた。

「ニユースは見たかね？」

「ええ」

定本が何か言いたそうだった。

「既に分かっているかもしれないが、殺されたのは我々組織の人間だ。」

「やはりそうですか」

「ああ。彼の所属の部隊が問題だからだろう。」

「第五中隊ですか？」

「そうだ。今第五中隊は潜入任務をしている。」

「潜入ですか」

「そうだ。以前にも二人が殺されている。おそらくばれているだろう。だがこの任務は引く訳にはいかない。」

そこらへんでもう予想がつく。

「つまり俺たちにもやらせると？」

定本の言葉に鉄西は頷く。

「やりますよ、俺は。ただでさえその殺したヤローに一発お見舞いしたいんだ。俺としては喜びますよ。」

定本はやる気満々に言う。

「で、どこを潜入するんですか？」

次の言葉で俺と定本は凍る。

「高校だ。」

嫌な予感（後書き）

特に無いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7200i/>

The song is weapons

2010年10月11日00時17分発行